

歴代誌第二25-28章「成功にある罫」

1A 神々への慕い求め 25

1B 御言葉への慎み 1-13

2B 防衛の崩壊 14-28

2A 祭司職への介入 26

1B 神の大いなる助け 1-15

2B 主の宮からの断絶 16-23

3A 確かにする道 27

4A 不信の罪 28

1B 主による引き留め 1-15

2B 靈的自傷 16-27

本文

歴代誌第二 25 章を開いてください。私たちは前回、ヨシャパテ王の後の混乱を読みました。ヨシャパテがアハブ家と縁を結んでしまったために、バアル信仰がその中に入ってきました。アタルヤがイザベルの娘だったからです。けれども、祭司エホヤダが宗教改革を断行しました。赤ん坊ヨアシュを神の宮で育て、七歳になった時に彼を王として立て、アタルヤを剣にかけて殺しました。

そしてヨアシュの治世を前回読みました。彼の生涯は、祭司エホヤダによって良い影響を受けていたけれども、彼が死んだ後に墮落したというものでした。私たちの学びはその続きになります。祭司また預言者によって良い影響を受けているけれども、そこから外れて損害を受ける王たちの記録です。ただし、中に、ヨタムという王だけが主に心を定めて仕えていきます。

1A 神々への慕い求め 25

1B 御言葉への慎み 1-13

25:1 アマツヤは二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はエホアダンといい、エルサレムの出であった。25:2 彼は主の目にかなうことを行なったが、全き心をもってではなかった。

王たちの記録は、このように端的にその評価が初めに書かれています。アマツヤの場合は、主の目にかなうことを行った、けれども全き心ではなかったというものです。初めに、主の目にかなったことを歴代誌の著者は記していきます。

25:3 彼の王国が強くなると、彼は自分の父、王を打ち殺した家来たちを殺した。25:4 しかし、彼らの子どもたちは殺さなかった。それは、モーセの書の律法に示されているところによったからである。主はこう命じておられた。「父親が子どものために殺されてはならない。子どもが父親のために殺されてはならない。人が殺されるのは、自分の罪のためでなければならないからである。」

アマツヤの父ヨアシユは、自分の家来によって殺されました。したがって、彼らに対する死刑を断行しました。けれども、彼は主の言葉を敬ったのです。殺人者の子に対しては罪は帰せられないというモーセの律法です。これは感情的にも、当時の習慣においても、耐えられない戒めです。感情的には一家全てを滅ぼしたいと願います。当時の習慣では確かにそのような復讐法が当たり前のように存在していました。しかし、アマツヤは慎みの霊をもって、神の命令に従ったのです。私たちも、感情において、また今の習慣によってこれをするのは当たり前だと思われることであっても、御霊の実に自制という特質がありますが、主の命令によって自制する必要がありますね。

25:5 アマツヤはユダを召集し、ユダおよびベニヤミン全員を、千人隊の長、百人隊の長の下に、父祖の家ごとに整列させた。こうして、二十歳以上の者を登録し、従軍して槍と大盾を手にする精鋭三十万人を得た。

彼が軍を召集しているのは、すぐ後で出てきますがエドムがユダに対抗して戦おうとしているからです。ヨシャパテの子ヨラムの時代、ユダに従属していたエドムが背いて、その支配から脱しようとした。

25:6 さらに、彼はイスラエルから、銀百タラントで、十万人の勇士を雇った。25:7 神の人が彼のもとに来て言った。「王よ。イスラエルの軍勢をあなたとともに行かせてはなりません。主は、イスラエル、すなわち、すべてのエフライム族とは、共におられないからです。25:8 それでも、あなたが行くと言われるのなら、そうしなさい。雄々しく戦いなさい。神は敵の前にあなたをつまずかせられません。神には、助ける力があり、つまずかせる力もあるからです。」

アマツヤは、かつてのヨシャパテと同じ過ちを犯しそうになりました。エドム軍を制圧するために、もっと多くの軍力が必要であると思いました。そこで肉の兄弟である北イスラエルから傭兵を雇いました。しかし預言者が戒めます。なぜなら、北イスラエルは主から離れて、墮落しているからです。キリストの名が付くものであればどんな方法でも良いではないか、というような、実用本位の考えは間違っています。主に対して、主の言葉に対して純粋であることが優先されます。

25:9 アマツヤは神の人に言った。「では、イスラエルの軍勢に与えた百タラントはどうしたらよいのか。」神の人は答えた。「主はそれよりも多くのものをあなたに与えることができになります。」25:10 そこで、アマツヤは、エフライムから彼のもとに来た軍隊を取り分けて、彼らの所に帰したので、彼らはユダに向かって怒りを激しく燃やし、怒りに燃えながら、自分たちのところへ帰った。

そうですね、自分が主に対して良心を清く保つことによって生じる経済的、物理的損失は、主がその不足を補ってくださいます。この信仰を持ちたいと思いますね、主の前に出る時、終わりの日に、御座の前に出る時に、私たちが申し開きをする時に、疑いもなくきちんと弁明ができるのか、このことを優先事項にしたいと思います。それだけでなく、主が不足を必ず補い、満たしてくださいます。

25:11 アマツヤは奮い立って、その民を率いて塩の谷に行き、セイルの者たち一万人を打った。
25:12 ユダ族は一万人生けどりにして、彼らを岩の頂上に連れて行き、その岩の頂上から、彼らを投げ落とした。彼らはひとり残らず砕かれてしまった。25:13 アマツヤが自分とともに戦いに行かせずに帰した軍隊の者たちは、サマリヤからベテ・ホロンに及ぶユダの町々に突入し、三千人を打って、多くの物をかすめ奪った。

主は、その少ない軍勢で大勝利を与えてくださいました。塩の谷とは死海の南にある、塩岩になっている地域でのことです。しかし、先のエフライムの男たちは腹いせに、ユダとイスラエルの境界辺りにあるユダの方の町々で虐殺と略奪行為を行いました。アマツヤが初めに犯してしまった過ち、傭兵にするために金を出したことへの付けが回ってきたのです。

2B 防衛の崩壊 14-28

25:14 アマツヤは、エドム人を打ち殺して帰って来て後、セイルの者たちの神々を持ち帰り、これを自分の神々として立て、その前に伏し拝み、これに香をたいた。25:15 そこで、主はアマツヤに向かって怒りを燃やし、彼のもとに預言者を遣わして、彼に仰せられた。「なぜ、あなたは、あなたの手からその民を救い出すこともできないような神々を求めたのか。」25:16 彼が王に語っているうちに、王は彼に言った。「私たちはあなたを王の議官に任じたのか。身のためを思ってやめなさい。なぜ、打ち殺されるようなことをするのか。」そこで、預言者はやめて言った。「私は神があなたを滅ぼそうと計画しておられるのを知りました。あなたがこれを行ない、私の勧めを聞かなかったからです。」

なんと、アマツヤは自分が打ち殺したエドム人の神々を拝んでしまいました。当時の偶像は遺跡で発掘されますが、なんとも醜い形をしています。何で、こんなものを拝みたいと思うのか不思議になりますが、仮に私たちの今の文明が滅んで、その廃墟で後世の人たちが発掘する家々から出てきたもので、頭を傾げるようなものがたくさん出てくるでしょう。私たちが流行で追っているものは、まずもって「何だこれ？」と思うものです。

偶像の本質は、「自分の欲望を満たす」あるいは「自分に仕える」ことです。パウロがコロサイの教会の人たちに言いました。「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。(コロサイ 3:5)」イスラエルの神をあがめる者にとって、形のない方をあがめることは肉の願いにはかないませんでした。目に見えないというところで、できれば目に見えるものが欲しいというものがあったでしょう。そして、イスラエルの神のみが聖なる方です。自分の欲望を小羊の血によって、また水洗いによって清めていただき、主に仕えるように命じられています。だから、エドムの神々を見た時に、その心の許し、あるいは弄びがアマツヤを迷わせてしまいました。

そして、その時に必ず主は、預言者を与えてくださいます。それは間違っていると云ってくれる叱責の声です。午前中に学びました、主は私たちをご自分の所有の民として愛しておられるから、叱責し、訓戒してくださるのです。しかし、アマツヤは叱責を聞き入れませんでした。ウジヤと同じ過ちを犯しています。

25:17 そののち、ユダの王アマツヤは、よく考えた上で、エフーの子エホアハズの子、イスラエルの王ヨアシュに、使者を送って言った。「さあ、勝敗を決めようではないか。」25:18 すると、イスラエルの王ヨアシュは、ユダの王アマツヤに使者を送って言った。「レバノンのあざみが、レバノンの杉に使者を送って、『あなたの娘を私の息子の嫁に出来ないか。』と言ったが、レバノンの野の獣が通り過ぎて、そのあざみを踏みにじった。25:19 あなたは、どうだ、自分はエドムを打ち破ったと言った。あなたの心は高ぶり、誇っている。今は、自分の家にとどまっていなさい。なぜ、争いをしかけてわざわざを求め、あなたもユダも共に倒れようとするのか。」25:20 しかし、アマツヤは聞き入れなかった。それは、神から出たことで、彼らがエドムの神々を求めたので、彼らを敵の手に渡すためであった。

先の預言者も、また歴代誌の著者も、アマツヤを敵の手に渡すことは神から出たことである、神のご計画であると言っています。ここで大事なのは、エドムの神々を求めたことが、一過性のものではないことです。アマツヤはこれを習慣的に行き、度重なる神の叱責にも関わらずそれを捨て去らなかったことに起因しています。

神の裁きは、既にアマツヤの思いの中から始まっています。17 節に「よく考えた上で」とあります。新共同訳では「協議の結果」とあります。決して感情や、思い付きで決めたことではありません。しかし、そのように思い巡らし、冷静な判断で下したと言えども、すでにアマツヤはエドムの神々を求めたことにより、霊的な判断力が狂っているのです。そのために軍事作戦における判断も、どんなに客観的に行っていようと間違っているのです。

そして大事なのは、北イスラエルの王ヨアシュの言葉です、19 節です。「あなたの心は誇り高ぶっている、今は自分の家に留まっていなさい」という言葉です。列王記第二 14 章に同じ話がありますが、「誇ってもよいが、自分の家にとどまっていなさい。(10 節)」とあります。使徒パウロがこう言いました。「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。(ガラテヤ 6:3-5)」すべてのことを主にあって行うのです。しもべが主人に対して、「ただ言いつけられたことを行っただけです。」と言うように、そこに誇るべきことは何一つありません。

アマツヤはエドムに打ち勝ったので、自分には敵はないと無敵感に浸りました。ソロモンの死後、分裂してしまった北と南の王国という現状があります。では、これを統一させるために、今、アマツヤがヨアシュに戦って勝敗を決めるようなものなのでしょうか？これが今朝の礼拝で学んだことであり、「分を越えない」という戒めであります。語っていることは理想的なのですが、それを行うように神から言われているのか、という問いかけを自分自身にしなければいけません。

25:21 そこで、イスラエルの王ヨアシュは攻め上った。それで彼とユダの王アマツヤは、ユダのベテ・シメシュで対戦したが、25:22 ユダはイスラエルに打ち負かされ、おのおの自分の天幕に逃げ帰った。25:23 イスラエルの王ヨアシュは、エホアハズの子ヨアシュの子、ユダの王アマツヤを、ベテ・シメシュで捕え、エルサレムに連れて来たうえ、エルサレムの城壁をエフライムの門から隅の門まで、四

百キュビトにわたって打ちこわした。25:24 またオベデ・エドムの管理していた神の宮にあったすべての金と銀、およびすべての器具、それに王宮の財宝と人質を取って、サマリヤに帰った。

ベテ・シメシュは、エルサレムの南西にある、かつてペリシテ人が契約の箱を載せて、その牛車が辿りついたところ。北イスラエルはそちらのほうに回って、その平野からエルサレムに浸透しました。そしてエルサレムの城壁を壊しましたが、エフライムの門から隅の門は北を向いています。西、南はヒノムの谷、東はケデロンの谷にエルサレムは囲まれていますから、攻められるのはいつも北です。そして神殿の財宝まで奪い取られました。

私たちが、主から行っていけないと言われることを靈的にもこのようになります。主にあって生きていくところで積みあげられてきた神の守りの壁が、私たちの心にできます。罪に対して敏感になり、それを犯さない、それから離れるという、新しい性質を身につけています。しかし、主から行ってはいけないと言われているものに敢えて手を出すと、その防御機制が壊れてしまいます。初めはものすごい良心の咎めを感じていたのに、二度目に行う時にはそれほどの痛みを感じません。そして、自分の靈的両機が敵によって蝕まれるのです。そして、主によって与えられた自分の尊厳、靈的な財産までも奪われてしまうのです。

25:25 ユダの王ヨアシュの子アマツヤは、イスラエルの王エホアハズの子ヨアシュの死んで後、なお十五年生きながらえた。25:26 アマツヤのその他の業績は、最初から最後まで、ユダとイスラエルの王たちの書にまさしく記されているではないか。25:27 アマツヤが主から離れた時、エルサレムで人々が彼に対して謀反を企てたので、彼はラキシユに逃げた。しかし、彼らはラキシユまで追いかけて、そこで彼を殺した。25:28 彼らは、彼を馬にのせて行って、ユダの町に先祖たちといっしょに葬った。

歴代誌の王の記録は、初めに靈的評価が端的に書かれており、そして最後にどのように民から敬われているのか、その葬られ方にも現れています。アマツヤは、父ヨアシュと同じく謀反によって殺されました。ラキシユは、ベテ・シメシュよりさらに南にある、そこを越えるとエジプトへの道につながる町です。そこまで逃げたのですが追いつかれました。そして、エルサレムの王たちの墓ではなく、他の先祖たちの墓に葬られました。

2A 祭司職への介入 26

1B 神の大いなる助け 1-15

26:1 ユダの民はみな、当時十六歳であったウジヤを立てて、その父アマツヤの代わりに王とした。26:2 彼は、アマツヤが先祖たちとともに眠って後、エラテを再建し、それをユダに復帰させた。26:3 ウジヤは十六歳で王となり、エルサレムで五十二年間、王であった。彼の母の名はエコルヤといい、エルサレムの出であった。26:4 彼はすべて父アマツヤが行なったとおりに、主の目にかなうことを行なった。26:5 彼は神を認めることを教えたゼカリヤの存命中は、神を求めた。彼が主を求めていた間、神は彼を榮えさせた。

アマツヤが謀反によって殺されたので、ウジヤは幼い年に、十六歳という年で王となりました。そして

五十二年という非常に長い統治です。主の目にかなうことを行ったという評価ですから、主がこれだけの長い統治を与えてくださったのでしょ。エラテとありますが、これは今のエイラット、ヨルダンのアカバ辺りにあった町です。紅海のアカバ湾に面する町です。そこはエドムが支配していましたが、エドムに対する支配を強めてそこを奪還したということです。そして午前礼拝で、5 節について話したので、聞いておられない方はぜひ後で聞いてください。次に、神が彼を榮えさせたその記録を読むことができます。

26:6 彼は出陣してペリシテ人と戦ったとき、ガテの城壁、ヤブネの城壁、アシュドデの城壁を打ちこわし、アシュドデの中の、ペリシテ人たちの間に、町々を築いた。26:7 神は彼を助けて、ペリシテ人、グル・バルに住むアラビヤ人、メウニム人に立ち向かわせた。26:8 アモン人はウジヤのもとにみつぎものを納めた。こうして、彼の名はエジプトの入口にまで届いた。その勢力が並みはずれて強くなったからである。

古からの周囲の敵どもに対して圧倒的な支配を回復します。ガテやアシュドデは、ペリシテ人の主要な五つの町の中に入っています。そしてアラビヤ半島の民族を打ち倒します。さらに、ヨルダン川の向こうにいるアモン人も従属させます。なんとエジプトの入口にまで彼の名が広がります。ソロモンの時はこれらの支配権はありましたが、それらが回復されつつあります。

26:9 ウジヤはエルサレムの隅の門、谷の門および曲がりかどの上にやぐらを建て、これを強固にし、26:10 荒野にやぐらを建て、多くの水ためを掘った。彼は低地にも平野にも多くの家畜を持っていたからである。山地や果樹園には農夫やぶどう作りがいた。彼が農業を好んだからである。

アマツヤによって取り壊された北の城壁を建て直したことについて書いていませんが、隅の門は北の城壁の西の角のところにあります。そして谷の門は東の壁の南の角にあります。都の防衛を強化しました。それから、今のイスラエルを彷彿させるようなことを行っています。荒野において水溜を作って、またやぐらを立てました。イスラエル旅行に行かれた方は、アラデの遺跡を思い出していただければと思います。そして低地とはシェフェラ地方のことです。低地そして平野はヨルダン溪谷のことでしょう、そこに農業を展開させています。

26:11 さらに、ウジヤは戦闘部隊をかかえていたが、彼らは、書記エイエルとつかさまアセヤによって登録された人数にしたがって各隊に分かれ、王の隊長のひとり、ハナヌヤの指揮下にくさに出る者たちであった。26:12 勇士である一族のかしらたちの数はみなで二千六百人であった。26:13 その指揮下には三十万七千五百人の軍勢があり、王を助けて敵に当たる強力な戦闘部隊であった。26:14 ウジヤは、彼ら全軍のために、盾、槍、かぶと、よろい、弓および石投げの石を用意した。26:15 さらに、彼はエルサレムで、巧みに考案された兵器を作り、矢や大石を打ち出すために、やぐらの上や、城壁のかどにある塔の上にこれを据えた。こうして、彼の名は遠くにまで鳴り響いた。彼がすばらしいしかたで、助けを得て強くなったからである。

私はここを読んで、世界の最強の軍隊、米軍を思い出しました。精鋭部隊に加えて先端技術による

兵器も備えています。大事なのは、「彼がすばらしいしかたで、助けを得て強くなった」というところです。新共同訳では「神の驚くべき助けを得て」となっています、助けは神から来ました。

2B 主の宮からの断絶 16-23

26:16 しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、主に対して不信の罪を犯した。彼は香の壇の上で香をたこうとして主の神殿にはいった。26:17 すると彼のあとから、祭司アザルヤが、主に仕える八十人の有力な祭司たちとともにはいって来た。26:18 彼らはウジヤ王の前に立ちふさがって、彼に言った。「ウジヤよ。主に香をたくのはあなたのすることではありません。香をたくのは、聖別された祭司たち、アロンの子らのことです。聖所から出てください。あなたは不信の罪を犯したのです。あなたには神である主の誉れは与えられません。」

ウジヤが犯した罪は、基本的に父アマツヤと変わりません。自分が王であり、王に与えられている務めが神によって定められています。その分を越えて、祭司に神が与えておられる務めに入り込んできたのです。香を焚くこと自体は主が行いなさいと命じられていることです、それを行って何が悪い、ということになります。いいえ、どんなに良いことであっても主が行いなさいと命じておられないのですから、してはいけないのです。

26:19 ウジヤは激しく怒って、手に香炉を取って香をたこうとした。彼が祭司たちに対して激しい怒りをいただいたとき、その祭司たちの前、主の神殿の中、香の壇のかたわらで、突然、彼の額にらい病が現われた。26:20 祭司のかしらアザルヤと祭司たち全員が彼のほうを見ると、なんと、彼の額はらい病に冒されていた。そこで彼らは急いで彼をそこから連れ出した。彼も自分から急いで出て行った。主が彼を打たれたからである。

王は、聖所の中には行って香を焚こうとしましたが、神の裁きはその求めているものから最も遠くに引き離すことによって表れました。らい病です。らい病にかかると、聖所の中はもちろんのこと、一般の民が入ることのできる外庭にも入ることが許されません。実に、イスラエルの民から離れて、「汚れている、汚れている」と人が近づいたら叫ばなければいけない、隔離されたところにいなければならないのです。父アマツヤも同じでした、北イスラエルまで勢力を増そうと思っていたところが、自分の都の城壁を打ち壊される結果となったのです。

そして彼が非常に恥じていることに注目してください。祭司が連れ出しただけでなく、彼も自分から急いで出ていった、とあります。額かららい病が出てきたので、隠しようもありませんでした。明らかに見える形で主が裁きを行われました。

26:21 ウジヤ王は死ぬ日までらい病に冒されていたので、らいを病む者として隔離された家に住んだ。彼は主の宮から絶たれたからである。その子ヨタムが王宮を管理し、この国の人々をさばっていた。26:22 ウジヤのその他の業績は、最初から最後まで、アモツの子預言者イザヤが書きしるした。26:23 ウジヤが彼の先祖たちとともに眠ったとき、人々は、彼はらい病に冒されていたからと言って、彼を王たちの所有していた野の墓地に先祖たちといっしょに葬った。彼の子ヨタムが代わって王となっ

た。

ウジヤがらい病になってから、子ヨタムとの共同統治になりました。そしてウジヤの業績がイザヤが書き記しているとあります。ここから、旧約聖書の預言書の第一の書であるイザヤが動き出す時期となります。彼はウジヤが活着している時から預言を始めました。けれども、預言者として神から任命を受けるのは、彼が死んだ後であるとイザヤ書 6 章にあります。ですから 1 章から 5 章までは、ウジヤが活着していた時にいった預言です。6 章で、ウジヤが死んだ後にイザヤは天にある神の王座を幻で見ました。イザヤでさえ、ウジヤのカリスマ的な指導力に魅せられていたのです。そのために、まことの王座が見えなくなっていました。

そしてウジヤは、らい病だったので王たちの墓に葬られませんでした。王たちが所有していましたが、王たちが所有していましたが、王たちの墓ではなく野の墓地に葬りました。

3A 確かにする道 27

27:1 ヨタムは、二十五歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼の母の名はエルシャといい、ツアドクの娘であった。27:2 彼はすべて、主の目にかなうことを行なった。父ウジヤが行なったとおりである。ただし、彼は、主の神殿にはいるようなことはしなかった。民はなお滅びに向かっていた。

ヨタムは短い治世ですが、それは父ウジヤと共同統治を行っていたためです。そして、ヨタムは生涯、主の目にかなうことを行っていました。主の神殿にはいるようなことはしなかったというのは、聖所の中にはいって香を焚くようなことはしなかった、ということです。

しかし、「民はなお滅びに向かっていた。」とあります。これは、イザヤ書 1-5 章を読むと良く分かります。王としては良い統治を行っていたとしても、王が主に心を一つにしていたとしても、民はまったく墮落していたのです。イザヤは、そのことをはっきりと、怒りをもって語っているのが、1 章から 5 章までを通して読むことができます。そして状況は、王自身が墮落するヨタムの子アハズによってなおのこと明らかになります。

27:3 彼は主の宮の上の門を建てた。また、オフエルの城壁上に、多くのものを建てた。27:4 彼はユダの山地に町々を建て、森林地帯には城塞とやぐらを築いた。27:5 彼はアモン人の王と戦い、彼らに打ち勝ったので、アモン人は、その年に、銀百タラント、小麦一万コル、大麦一万コルを彼に贈った。アモン人はこれだけのものを彼に納めた。第二年にも第三年にも同様にした。

主の宮の上の門は、宮の北側にある門です。そしてオフエルの城壁は神殿の敷地のすぐ南にあるところです。このようにしてヨタムは、神殿がしっかりと守られるように、その聖なる空間が維持できるように注意を払いました。そして、ユダの山地には町々を、森林地帯には城塞を建てて、ユダの防衛に努めています。そして周囲の国々との関係は、アモン人の貢物が際立っていました。こんなにも大量の食糧が納められたのは記録的でした。

27:6 このように、ヨタムは勢力を増し加えた。彼が、彼の神、主の前に、自分の道を確認なものとしたからである。

ここが、ヨタムが今日学ぶ他の三人の王と異なる部分です。主の目にかなうことを行っただけでなく、自分の道を主の前に確認なものとしたことです。ヨシヤパテ王も同じ評価を神から受けました。「あなたはこの地からアシェラ像を除き去り、心を定めて常に神を求めて来られました。(19:3)」心を定めた、というのが、「確認なものとした」と同じヘブル語が使われています。心を定める、堅くする、しっかりと備える、そのような意味があります。

彼は、父ウジヤの最後の世話をし、統治は短く、そして、決してアサやヨシヤパテのような目覚ましい働きをしていませんでしたが、ヨタムについて悪いことは何一つ書かれていないというのは目に留めるべきです。その秘訣は、自分の道を主の前に確認なものとしたことでした。ぶれませんでした。私はヨタムを尊敬します。

27:7 ヨタムのその他の業績、彼の戦いと彼の行ないは、イスラエルとユダの王たちの書にまさしくしるされている。27:8 彼は二十五歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。27:9 ヨタムは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をダビデの町に葬った。彼の子アハズが代わって王となった。

ヨタムは、最後までしっかりと走り、そして安らかに葬られました。初めは良かったのに、終わりが不名誉という王が多いです。私たちがたとえ目覚ましい働きをしていなくても、忠実で、しかも最後まで忠実であることを一生の目標にしましょう。

4A 不信の罪 28

次の王、アハズは、終わりが悪いだけでなく、始まりから終わりまで一貫して悪い王です。

1B 主による引き留め 1-15

28:1 アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、主の目にかなうことを行わず、28:2 イスラエルの王たちの道に歩み、そのうえ、バアルのために鑄物の像を造った。28:3 彼は、ベン・ヒノムの谷で香をたき、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもたちに火の中をくぐらせた。28:4 さらに彼は、高き所、丘の上、青々と茂ったすべての木の下で、いけにえをささげ、香をたいた。

このアハズは、南ユダにとって悪い意味で大きな分岐点となった王です。そしてアハズによって、ユダの国は独立を失いました。彼によって周囲の国々はユダに従属することはなくなり、ユダ自身がアッシリアの属国となりました。そして、なぜそうってしまったのか、歴代誌の著者はしっかりと記録に残しています。それは明確な背教です。背教とは異教と違います。異教とは、もともと神を知らない人々のことを指します。背教とは、神を知っているはずなのに、それから背を向けて、信仰から離れることを意味します。歴代誌の著者は、その点をはっきりさせており、まず「父祖ダビデとは違って」と記しています。しかるべき姿は、ダビデのように全き心をもって主に従うことでした。ダビデがユダの王たちの

手本であり、その影響下に生きていくべきでした。

ところが、その正反対のことは行います。二つの悪いものに倣ったことを書いています。一つは、イスラエルの王たちです。金の子牛のような代替宗教を抱き、それだけでなく、イゼベルによってもたらされたバアル信仰を拝んだのがイスラエルです。この二つをアハズは行いました。そして、ヨシュアたちがイスラエルに入る時に、カナン人たちが行っていた忌まわしいことをアハズが行い始めました。その最も憎むべきは、子たちを火の中にくぐらせることです。

これはモレク信仰です。両腕が前に出ているこの偶像を火で焚いて真っ赤にします。そこに生まれた赤ん坊を載せ、その泣き声を掻き消すために太鼓を叩きます。主は、このことを最も忌まわしいことの一つとして、レビ記 20 章でこのような強い言葉で戒めています。2-5 節です。「あなたはイスラエル人に言わなければならない。イスラエル人、またはイスラエルにいる在留異国人のうちで、自分の子どもをモレクに与える者は、だれでも必ず殺さなければならない。この国の人々は彼を石で打ち殺さなければならない。わたしはその者からわたしの顔をそむけ、彼をその民の間から断つ。彼がモレクに子どもを与え、そのためわたしの聖所を汚し、わたしの聖なる名を汚すからである。人がモレクにその子どもを与えるとき、もしこの国の人々が、ことさらに目をつぶり、彼を殺さなかったなら、わたし自身は、その人とその家族から顔をそむけ、彼と、彼にならいモレクを慕って、淫行を行なう淫らな者をすべて、その民の間から断つ。」ヒゼキヤの子マナセがこれを大体的に行い、それで主はもうユダを滅ぼすことを決めてしまわれました。それほど忌まわしい行いでありました。それを今日も、平気で墮胎という形で行っていることを思わなければいけません。

そして、高き所、生い茂ったところで、いけにえを捧げていた、とあります。これはオカルト的な儀式であり、そして道徳的にも忌まわしいことでもありました。辺り構わず性的倒錯を行うのと同じです。

そしてこれらのことを、北イスラエルの王でもなく、カナン人でもなく、ダビデを父祖とする王が行ったというところに、アハズの背教的姿勢があります。これを終わりの日に、教会の中で起こることを使徒たちは警告しました。ユダの王たちにとってのダビデは、私たちにとってはダビデの子キリストであります。キリストに倣うはずの者たちが、神から遠く離れた異教徒が行うことと全く同じことを行っている時、それを背教と言うのです。テモテの第二の手紙 3 章 1-5 節までを読みます。「終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」4 節まで読めば、世がこれだけどんどん悪くなるのだと読むことができるのですが、これらの悪いことを、「見えるところは敬虔である」者たち、すなわち教会の者たちが行う、というのが、ここで話していることなのです。

キリスト教会の中における、恐ろしい事件、一般社会の基準によってもやってはいけないことが、神の名前によって、キリストの名を使って行われているという恐ろしいことが起こっています。私たちはし

っかりと目を覚まして、主の憐れみの中に留まっていなければいけません。罪に惑わされないように日々、私たちは互いを励ます必要があります。

28:5 彼の神、主は、彼をアラムの王の手に渡されたので、彼らは彼を打ち、彼のところから多くのとりこを捕えて行き、ダマスコへ帰った。彼はイスラエルの王の手に渡されたので、イスラエルの王は彼を打って大損害を与えた。28:6 レマルヤの子ペカはユダで一日のうちに十二万人を殺した。みな勇者たちであった。彼らはその父祖の神、主を捨て去っていた。28:7 ついで、エフライムの勇士ジクリは、王の子マアセヤ、その家のつかさズリカム、王の補佐官エルカナを殺した。

北イスラエルにとっても、アラム、つまりシリアは敵でありました。けれども、互いの戦いなど無きものにするような、恐ろしい化け物のような巨大な勢力が北から現れました。アッシリヤです。アッシリヤが強くなったので、パレスチナ地方の国々は、これまで互いに敵であったけれども連合してアッシリヤに対抗するという動きが出てきました。そこで一つになったのがアラムと北イスラエルです。そしてアラムと北イスラエルは、ユダを自分たちに従属させることによって、ユダも自分たちに取り込んで、アッシリヤに立ち向かおうとしました。そこでイスラエルとアラムの王は、自分たちにとっての傀儡の王をユダに立てようと企みました。

今、このように詳しい背景を話していますが、これらのことはイザヤ書 7 章に詳しく書いてあります。イザヤが神に召されたのは、ユダが一気に背教へと向かうその時に、激しい熱情によって語りかける主ご自身の思いを携えて預言を行いました。

28:8 さらに、イスラエル人は、自分の同胞の中から女たち、男女の子どもたちを二十万人とりこにし、また、彼らの中から多くの物をかすめ奪って、その分捕り物をサマリヤに持って行った。28:9 そこには主の預言者で、その名をオデデという者がいた。この人はサマリヤにはいつて来た軍勢の前に出て行って、彼らに言った。「見よ。あなたがたの父祖の神、主がユダに対して憤られたため、主はあなたがたの手に彼らを渡された。ところが、あなたがたは天に達するほどの激しい怒りをもって彼らを殺した。28:10 今、あなたがたはユダとエルサレムの人々を従えて自分たちの男女の奴隷にしようとしている。しかし、実はあなたがた自身にも、あなたがたの神、主に対して罪過があるのではないか。28:11 今、私に聞きなさい。あなたがたが自分の同胞をとりこにしたそのとりこを帰しなさい。主の燃える怒りがあなたがたに臨むからです。」

ユダが墮落したので、主がアラムそしてイスラエルがユダに徹底的な敗北をもたらした、というのは事実でした。けれども、さらに二十万人のとりこ、そして多くの分捕り物を持ってきたことは主の御心を損なうことでした。兄弟に対して、同胞に対して神は奴隷にすることを、決してあってはならないと思っておられます。彼らはエジプトから出てきた、解放され、自由を得たイスラエル人ですから、モーセの律法には奴隷になることを決してあってはならないこととして書いてあります。

28:12 そのとき、エフライム族のかしらたちの中から、ヨハナンの子アザルヤ、メシレモテの子ベレクヤ、シャルムの子ヒゼキヤ、ハデライの子アマサなどの人々が、いくさから帰って来た者たちに向かっ

て立ち上がり、28:13 彼らに言った。「あなたがたは、とりこをここに連れて来てはならない。私たちを、主に対して罪過のある者とするようなことをあなたがたは考えて、私たちの罪と私たちの罪過に、もう一つを加えようとしている。私たちの罪過は大きい。燃える怒りがイスラエルに下される。」28:14 そこで、武装した者はつかさたちと全集団の前で、とりこ、かすめ奪った物を手放した。28:15 指名された人々が立ち上がって、とりこの世話をし、その中で裸の者にはみな、分捕り物を用いて衣服を着せた。彼らに衣服を着せてから、くつをはかせ、食べさせ、飲ませ、油を塗ってやった。そのうえ、足の弱い者はみな、ろばに乗せて運び、彼らの兄弟たちのもと、なつめやしの町エリコに連れて行った。こうして、彼らはサマリヤに帰った。

興味深いことですね、墮落していた北イスラエルの者たちですら、この預言の言葉には恐れをなしています。覚えていますか、あのとてつもない恐怖国家アッシリヤの首都ニネベでも、預言者ヨナの言葉によって王自ら灰をかぶって、民も悪から立ち上がろうと努力していました。私たちの目には、主から遠く離れているように見える人であっても、主はそれぞれの良心において、神を恐れる啓示を与えることがおできになるのです。

2B 靈的自傷 16-27

そして次からが問題です。アハズは、このことにも関わらず、主に拠り頼まなかったのです。

28:16 その時、アハズ王はアッシリヤの王たちに人を遣わして、助けを求めた。

今、見たように、主がイスラエルとシリヤによるユダに対する攻撃を妨げておられました。ユダに対して、主は憐れみをかけてくださり、守っていて下さったのです。二人の王が悪巧みをしている時に、再び攻撃をしかけようとしていた時に、イザヤ書7章を読みますと、主はイザヤによってアハズに、「そのことは決して起こらない。」と語られました。しるしを求めよ、と言ったところ、アハズは神を信じたくないので嫌だ、と言ったところ、主みずから徴を与える、それは処女から子が生まれるというものでした。

そしてイザヤは、それでもアッシリヤに頼ろうとするなら、アッシリヤに守られるどころか、むしろアッシリヤがあなたに浸透してくることだろう、と預言しました。果たしてそうになりました。アッシリヤは、アハズが貢物を出したことによって、シリヤを倒し、そして北イスラエルも滅ぼしましたが、アッシリヤそれだけに留まらず、ユダの町々にも攻め入ってきたのです。

人間の罪の性質とはこのようなものです。北イスラエルのように、主なる神についての知識が少ないのにも関わらず、そこで語られたことに応答しているのに、南ユダのように、正統派であり、正しい教えを受けているにも関わらず、なおのこと応答しません。

28:17 エドム人はなおも攻めて来て、ユダを打ち、とりこを捕えて行った。28:18 ペリシテ人は、ユダの低地およびネゲブにある町々に突入し、ベテ・シエメシュとアヤロンとゲデロテ、およびソコとそれに属する村落、ティムナとそれに属する村落、ギムゾとそれに属する村落を取って、そこに住んだ。28:19 これは、主がユダの王アハズのゆえにユダを低くされたためであり、彼がユダでほしいままに

事を行ない、主に対して不信の罪を犯したからである。

アマツヤがエドムを倒し、ウ ज्याがペリシテ人の町々を倒したのに、今はどちらからも攻められています。そしてその原因が、「不信の罪」であるとあります。そうです、アハズは主なるイスラエルの神以外のものなら、何でも抛り頼むのです。けれども、主なる神だけは抛り頼まない、それを嫌いました。主がユダの国に良くしてくださることを信頼しませんでした。そして、ユダの国が神のものであるという考え自体を嫌悪しました。

28:20 アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルは、彼を攻め、彼を悩ました。彼の力にはならなかった。
28:21 アハズは主の宮と王およびつかさたちの家から物を取って、アッシリヤの王に贈ったが、何の助けにもならなかったのである。

お話しした通りです。アッシリヤに頼っても、何の助けにもなりません。むしろ、彼を悩ましたのです。アハズは、霊的な自傷行為をしています。自分を守る方を拒み、自分を痛めつける相手に頼ろうと近づいていくのです。

28:22 アッシリヤの王が彼を悩ましたとき、このアハズ王は、ますます主に対して不信の罪を犯した。
28:23 彼は自分を打ったダマスコの神々にいけにえをささげて言った。「アラムの王たちの神々は彼らを助けている。この神々に私もいけにえをささげよう。そうすれば私を助けてくれるだろう。」この神々が彼を、また全イスラエルをつまずかせるものとなった。28:24 ついで、アハズは神の宮の器具を集めた。彼は神の宮の器具を断ち切ってから、主の宮の戸を閉じ、エルサレムの町かどの至る所に祭壇を造った。28:25 ユダの町という町にはすべて、ほかの神々に香をたくため高き所を造り、彼の父祖の神、主の怒りをひき起こした。

なんと、自分たちを悩ましたダマスコの神々をユダに持ち込みました。そして、イスラエルの神、主の宮の礼拝をやめさせたばかりか、ダマスコの神を拝むように民を唆したのです。

これが、私たちが罪に対して、持っている傾向です。すなわち、自分を痛めつけるものに、自分が敢えて近づきます。このような不道德な関係を持っていれば、自分が壊されてしまうと分かっているのに、あえてそれに近づきます。このような悪習慣をしていけば自分を滅ぼすと分かっているのに、あえてそれをし続けます。そして、その背後には不信の罪があります。何か悪いことが起こると必ず神のせいになります。自分が神に仕えていないから起こっている問題なのに、その問題を神のせいにするのです。そして、神のせいにするので、ますます偶像を礼拝するのです。この悪循環に陥ります。

28:26 彼のその他の業績と彼のすべての行ないは、最初から最後まで、ユダとイスラエルの王たちの書にまさしく記されている。28:27 アハズは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をエルサレムの町に葬った。彼をイスラエルの王たちの墓に運び入れなかったからである。彼の子ヒゼキヤが代わって王となった。

アハズも不名誉な葬られ方をしています。王たちの墓に入れてもらえませんでした。私たちは、どの王の生き方をしているでしょうか？アマツヤまたウジヤのような生き方でしょうか？成功したから、かえって祈ることを怠り、自分自身でできると思っていないでしょうか？アハズのように、初めから主を信頼していない、悪いことが起こったら神のせいにして、ますます神ではなく他のものにはまっついていないでしょうか？それともヨタムのようなのでしょうか？彼は目立ったことはしていません。ただ心を定めて、主を求めていきました。最後まで走りました。